

往て遣つた事が無いとはあんまりぢやないか。本人にしても親御達にしても、俺しが十遍往くより汝が一週往て優しい事を云ふて遣りや、其方がなんぼ嬉しいやら解りやせん。何とした邪見な心を持てるのぢや。」

「さあ。けれども見舞に往た依てにと云ふて病人が癒るもんやなし。まアお父つあんが物好きで往かうと思ひなはるのやつたら、お慰みにおいでやす。」

「慰みとは何と云ふ云ひ草ぢや。人で無し奴ツ。」

「まあ親旦那さん御立腹は御尤も、若旦那。貴方がいきまへん。」

「番頭どん。俺しやこんな倅を持つたかと思ふと、世間様に申し譯が無い哩。」

「まア左様一途に仰有る物やムりまへん。後で又私から篤と御意見申し上げます。エエ處で唯今御寮人さんのお實家からお使ひが見えまして、急にお越しを願ひ度いとのお口上で。」

「何、嫁の實家から。フム／＼。急に來て呉れてかい。フーム。何ぢや病人の様子でも變つたんと違ふかいナ。」

「エ、どうやら急にお悪いらしうムります。」

「ア、そりやどむならん。それでは俺しは直ぐ往て参りますでナ。どうぞ留守中何分お頼申します。」

「承知を致しました。定吉をお供にお連れ遊ばして。」

「ア、左様か、店の手を取て濟まんが、そんなら定吉を貸して貰ひましょ。」

「コレ定吉。お清どんに云ふて親旦那のお羽織を出して貰ら。それからお履物を揃へるのぢや。」

「いや憚り／＼。俺しや事に依たら先方で泊つて夜通し看病をして遣るかも解らん。そこで番頭どん呉々も頼んどきますのはナ。どうぞ俺しの留守中あの極道をば一寸も外へは出しとくなさんなや。」

斯ういふ折柄、何時どんな用が有るや解らん。行先が知れんと云ふ様な事では、向ふの親達へ云ひ譯が立たんでナ。」

「承知を致しましてムります。」

「定吉御苦勞ぢや。ハイ往て参ります。」

「どうぞお早うお歸り……。」

「……オイ。……オイ番頭……。」

「オ、若旦那、何時の間に背後へ來てゝおましたんや。吃驚しましたかな。」

「アハハハ、親爺出て行きよつたナ。……チョツと頼むで。」

「何をだすね。」

「エへへ……なア、チョツと二時間……。」

「いや、二時間どうすると云ひなはんね。」